

利忠書状

(包紙上書)

きのしたしゆりのすけ
木下修理亮
としただ

すみとうべえのじょうどの
参
御宿所

利忠

(本文)

(御子息様の御元服(満十四・五歳〜十八歳まで)の御礼に)

おんぞうしさま 御元服(満十四・五歳〜十八歳まで)の御礼に

御曹司様 御元服為御禮御

(大小二本の刀を 差し上げいたします) (おん)たちひとこし 差し上げいたします

太刀一腰 御進上候 則致披露候

(喜ばしく目出度きこと お手紙で 述べられ 従って)

御祝着之旨 以御書被成御申随而

(上様へ 三十疋(銭十文〓一疋、又は布地二反〓一疋)を献上しました 大変お慶びになられた)

上様江 参拾疋 参候 目出度被思召候

(上様からは お返しに 五明一本(蠟燭五本を一束)を差し上げいたします)

従上様 為御返五明一本 被参候御

(お祝いの品でございます 次におんめのとえ 料紙(紙・障子紙等)を)

祝儀斗候 次に 御臈御乳入江料紙被

(差し上げいたします 詳しくは御返事に お述べられました それはそれで又 私共には)

参候 委細御返事二被仰候將亦我等

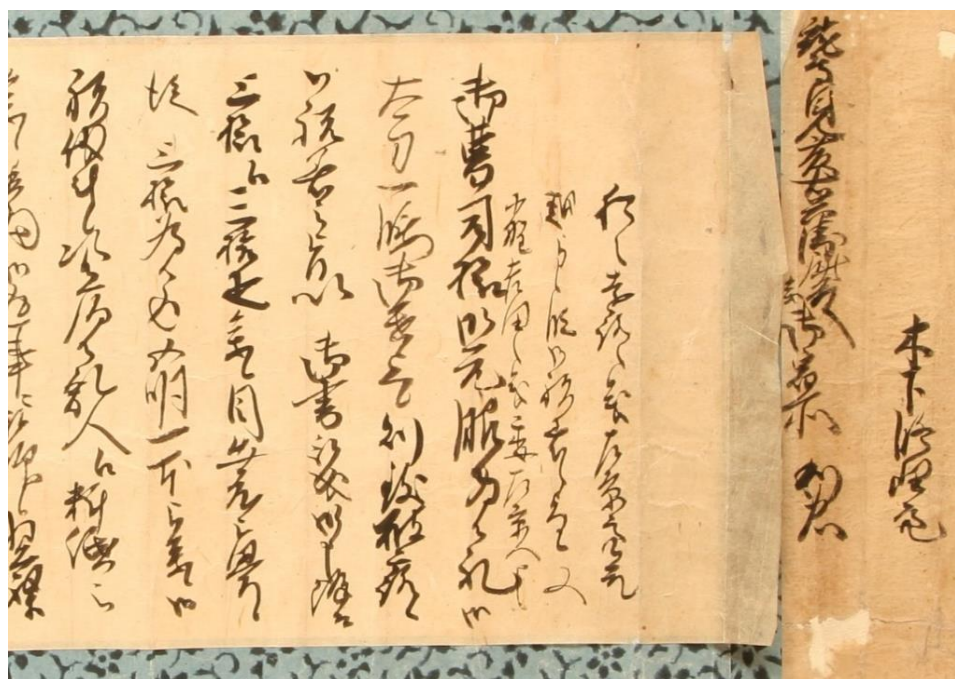
まいられそうろう さいごへんじに おおせられそうろう はたまた われら

参候 委細御返事二被仰候將亦我等

参候 委細御返事二被仰候將亦我等

参候 委細御返事二被仰候將亦我等

参候 委細御返事二被仰候將亦我等



右側のもはこの手紙を包んでいた封で、宛名と差出人を書く。普通は捨ててしまう。左の本文の右端には切封の跡がある。

(方へ) 料帛(料紙のこと)及び包丁刀を お心遣い頂き有難うございます
かたへ りようし ほうちようがたな ぎよいにかけられそうろう

かたへ 料帛包丁刀 被懸御意候

(ご親切の事 有難すぎることでございます 私からは お祝いとして 干鰯(ひぼう)干しイナダ
出世魚のブリのこと)

ごねんごろのだん おそれいりそうろう わたくしより しゅうげんまでに ひぼう
御懇之段畏入候 自私祝言迄二 干鰯

(二本 差し上げ致します それについて ご扶持(お願い)のことは
にほん すすめいれそうろう それにつき おふちのぎ)

二本 進 入 申 候 就 其 御 扶 持 之 義

(細部にわたってお知らせいたします 詳しい事情は 左京亮殿へ)
つぶさに ひろういたしそうろう いきよく さきようのすけどのへ

具 致 披 露 候 委 曲 左 京 亮 殿 江

(御返事 申し上げる間は 詳しく書きません おそれおおくも
ごへんじ もうしあげる あいだは よくつまびらかにせずそうろう きようきよう

御返事 申入候間 不能詳候 恐々

(謹んで申し上げます)
きんげん

謹言

(天文年間前期頃)
三月八日

とただ (木下修理亮利忠)
利忠 (花押)

すみとうべえのじようどの まいる

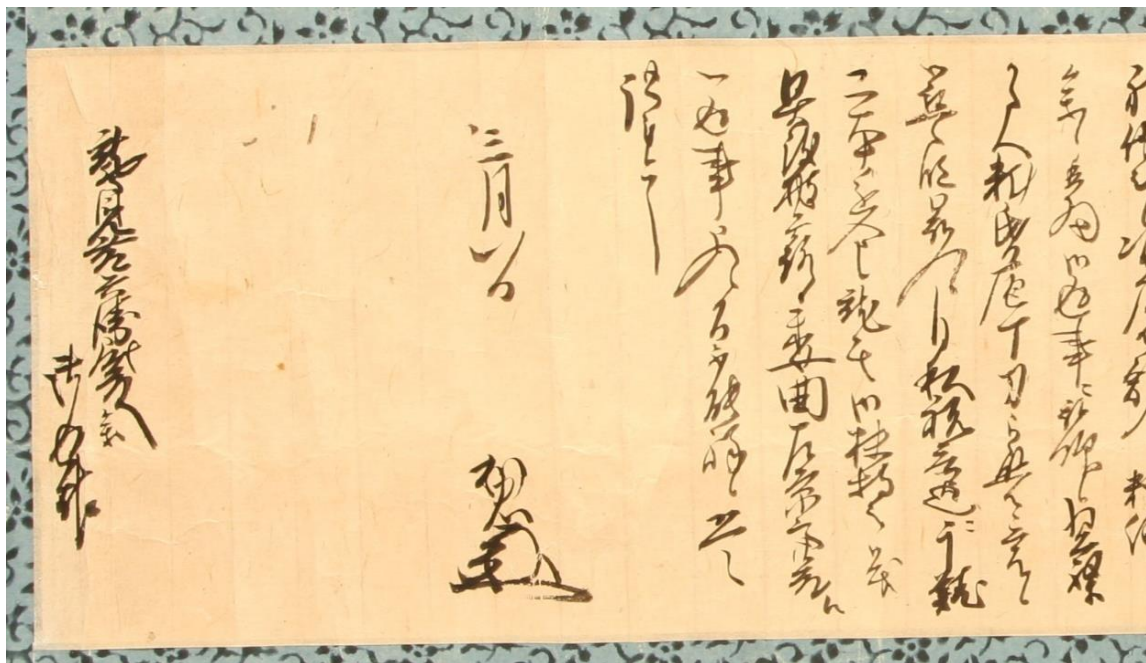
鷲見藤兵衛尉殿 参

ごへんぼう
御返報

(追伸文||本文の前の小文字)

(なお、 遠いところを 左京亮殿が)
なおなお えんろのぎ さきようのすけどの

猶々 遠路之義 左京亮殿



(お越しに成られた事 喜ばしい限りでございます
もうしこされ そうろうのだん ごしゅうちやくのむねにそうろう また
越 被 申 候 段 御 祝 着 旨 候 又

(小野吉田の事は 詳しく 左京殿へ申し上げます)
おのよしだのぎ くわしくはさきようへもうしそうろう

小野吉田之義 委左京へ申候

(八幡小野吉田のことか)

この手紙についての解説

「鷲見藤兵衛は木下利忠を介して土岐氏の御曹司の元服祝いの為に太刀を贈呈した。その利忠の返事である。

その時、上様(御曹司の生母)に三十疋、乳母や女官へも料紙を差し上げた。

そして、仲介をとってくれた利忠には料紙と包丁刀をお礼として贈った。

上様からはお返しに灯明5本を御祝儀として(藤兵衛に)くださった。

藤兵衛は利忠からも祝言として干しイナダを二本もらった。

扶持(多分領地のことでの依頼、追伸にある小野吉田のことであろうと予想される)のことについては、左京亮から直接詳しく伝えられるので聞いて欲しい。」

左京亮は遠路はるばる手紙を届けたことがわかるので、彼は鷲見藤兵衛の身内であろうと予想される。

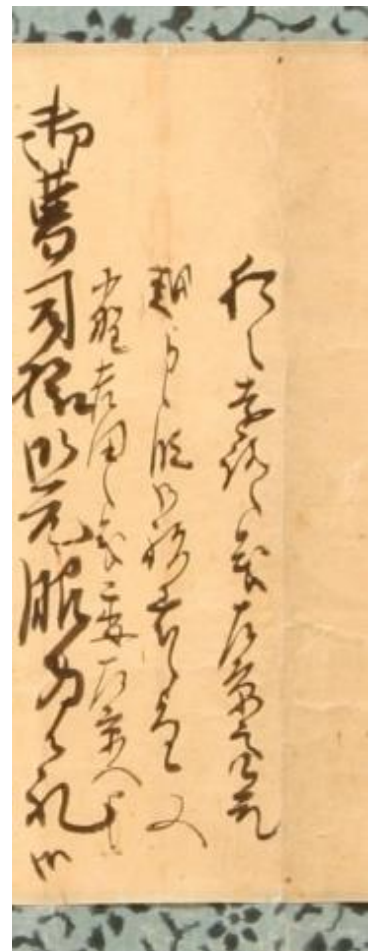
こういう贈呈をしたのは最後の扶持の依頼をするためで、それが何であったのか、どういう結果になったのかは手紙には書かないものである。

なお、利忠は反頼芸側の人物だという。

これらの手紙には切封と封をした印が残っている。

切封については次のサイトを参照のこと。

このようなことは実際にその場で見て、実演をしていただいで、その証拠を見ないと、知ろうともしないだろう。



利茂書状

(包紙上書)

すみとうべえのじょうどの
鷲見藤右兵右衛尉殿

(ごしゆくしよ)

ある御宿所

(永正一八年の手紙が長龍寺にある。)

さいとうたいとうざえもん
斎藤帯刀左衛門
とししげ

利茂

(本文)

(御屋形様に対しましたは) *一字空白は欠字で御屋形様土岐頼芸への儀礼

おやかたさまへたいしたてまつられ

被奉對 御屋形様

(お粗末な取り扱いはしていなかった それいらい)

おんそりやくなきのだん

無御疎略之段 其以來

(お便りを思っていたところ 右衛門尉殿へ)

ごこんもうのおもむき どう うえもんのじょう

御懇望之趣 同 右衛門尉 (斎藤右衛門尉)

(相談申し上げたところ)

そうだんもうしあげそうろうところ

相談申上候處 被成

(ご承知なられたとのこと そうそう)

ごいとくなされたむねそうろう そうそう

御意得旨候 早々御

(お帰りになられませ その様でございます)

きじゆうしかるべくそうろう

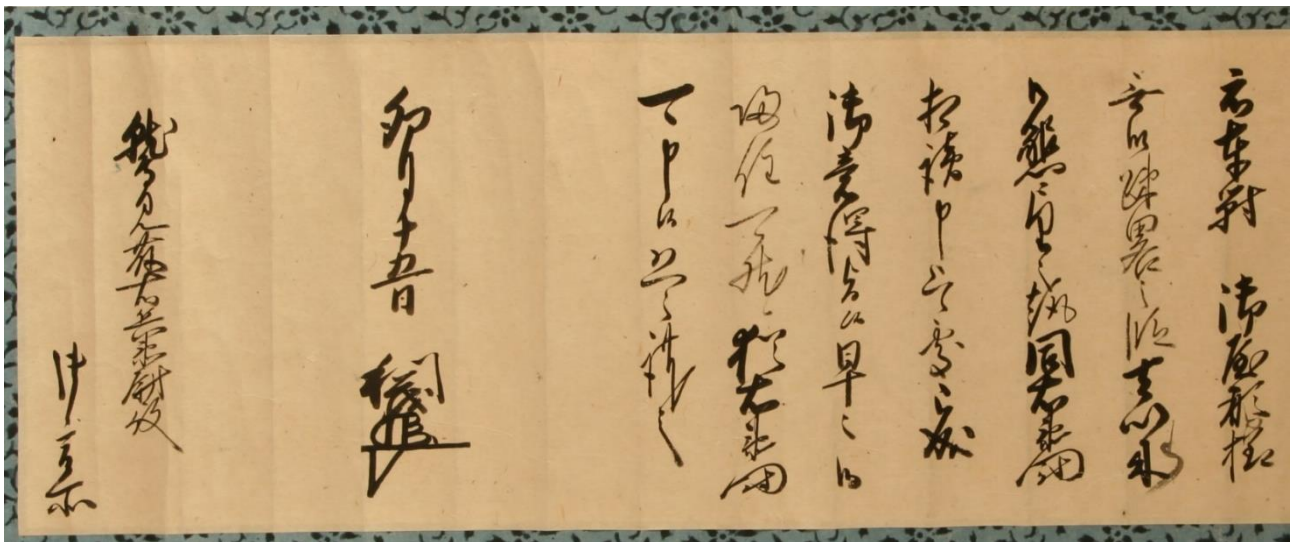
帰住可然候

なお 右衛門尉も)

な お うえもんのじょうどのも
猶右衛門尉
恐れ多くも謹んで申し上げます

もうすべくそうろう 恐々謹言

可申候



卯月十五日

利茂（花押）

驚見藤右兵衛尉殿

御宿所

斎藤利茂（とししげ）は土岐頼芸のもとで守護代を務める。天文十年（一五四一年）までその動静が判明しているが、道三が頼芸を追放した際にともに、追放されて没落したと伝わる。

實安書状「その一」

（本文）

（お手紙

詳しく

拝見しました

したがって

おんじよう

いさい

はいけんもうしせうろう

よつて

御状

委細

拝見申候

仍

（次郎殿様の

国元へのお帰りのことにつき

早速の

じろうとのさま

ごきこくのぎに付き

そうそう

次郎殿様

就御帰国

之義早々

（お手紙

御尤もにございます

その内容をほかならぬ

ごおんしん

もつともにぞんじせうろう

そのおもむきすなわち

御音信

尤に存候

其趣則

（御屋形様へ

申し上げますと

おやかたさまえ

もうしあげせうろうところに

御屋形様

江上候

處二被成

（ご承知に

なられたと

もうされ

ぎよいをえなされ

もうしせうろう

じろうとのさまえの

御意得

申候

次郎殿様へ之

（お礼のことは

宿老衆（古くからの家来衆に

相談申し上げた）

おんれいのこと

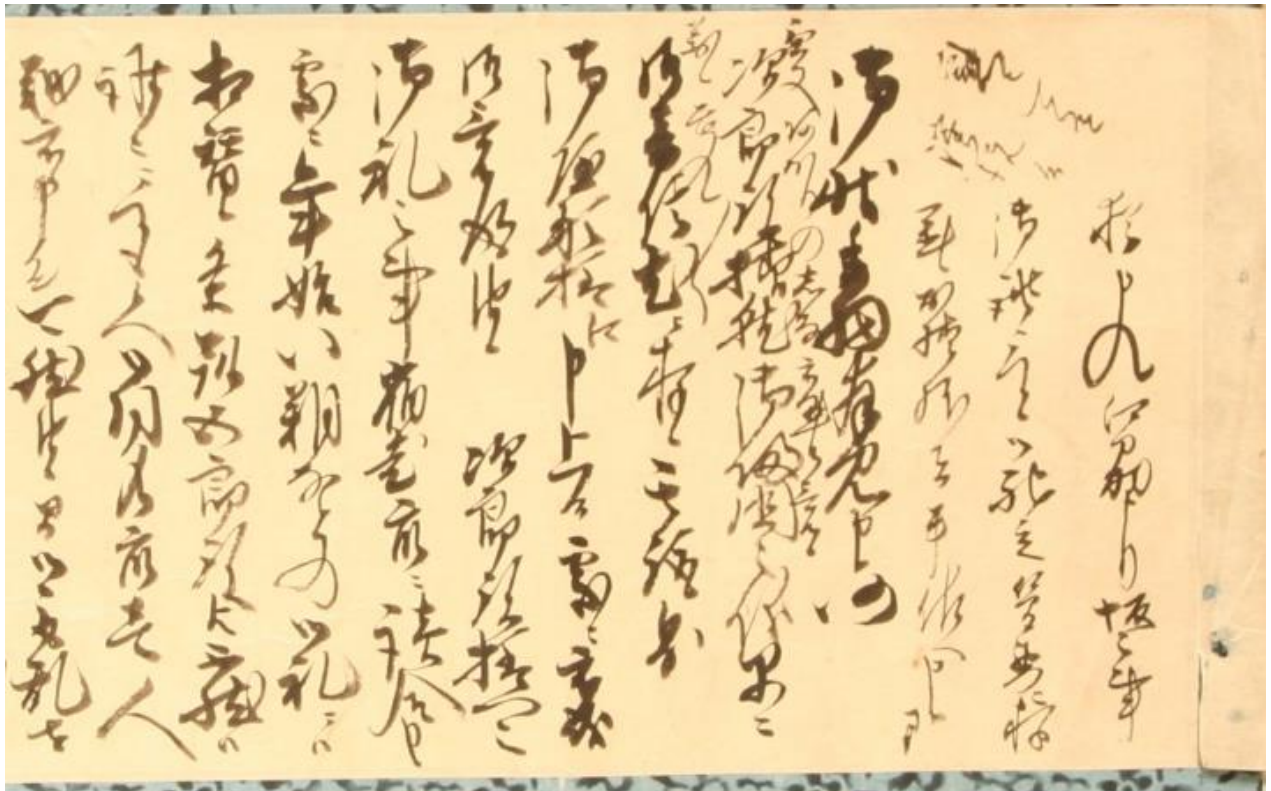
しゆくろうしゆうに

だんじあいもうしせうろう

御礼之事

宿老衆に

談合申候



(ところ) 正月お盆などの
おんれいには

ところねんしはつきくなどの
御礼ニハ

處に年始八朔などの
彦五郎殿と不然ハ

(変わっており) 「名代として」彦五郎殿で
なかつたならしからずんば

相替候条彦五郎殿と不然ハ
あいかわりそうろうのじようひごころうどのと

(誰にでもそのようにいたします) 同じような古くからの御家来衆一人
ごどうみようしゆういちにん

誰ニテモ候へ御同名衆壺人
御心配は)

(お越しになられて) よれでよかろうかと
おとりみだしは

越被申候て可然申候間御取乱者
こしもうされそうろうてしかるべくのよしそうろうあいだ

(尤もなことです) 早速承知して度胸を決めることが
大切である)

去事に候へ共早々其御意得専
さることにそうらえどもそうそうそのぎよいをえせん

ようにぞんじそうろう
(様子は) 平佐から)

用存候
ようたいにおいてはいざより

(申し上げがあるとおもいます) 於様躰者平佐より
それはそれで又郡内をとり合う(郡内の争い)

可有傳達候將又其郡内取合
でんたつあるべくそうろうはたまたそのぐんないとりあう

(であるが) 大変御心配のことであろうと存じます
油断をせずに)

よしにそうろうばんばんおんこころもとなくぞんじそうろう
ごゆだんなく

由候萬々無御心元存候無御由
(全ての事を処理することが大切である)
かんようにぞんじそうろう

断諸事御調略簡要ニ存候
しよじごちようらく

(がてら(そうしなから)後の手紙が着く間は) 今詳しいことは書けません
つまびらかにあたわずそうろう

かたがたこうおんのときをきし
そうろうあいだ

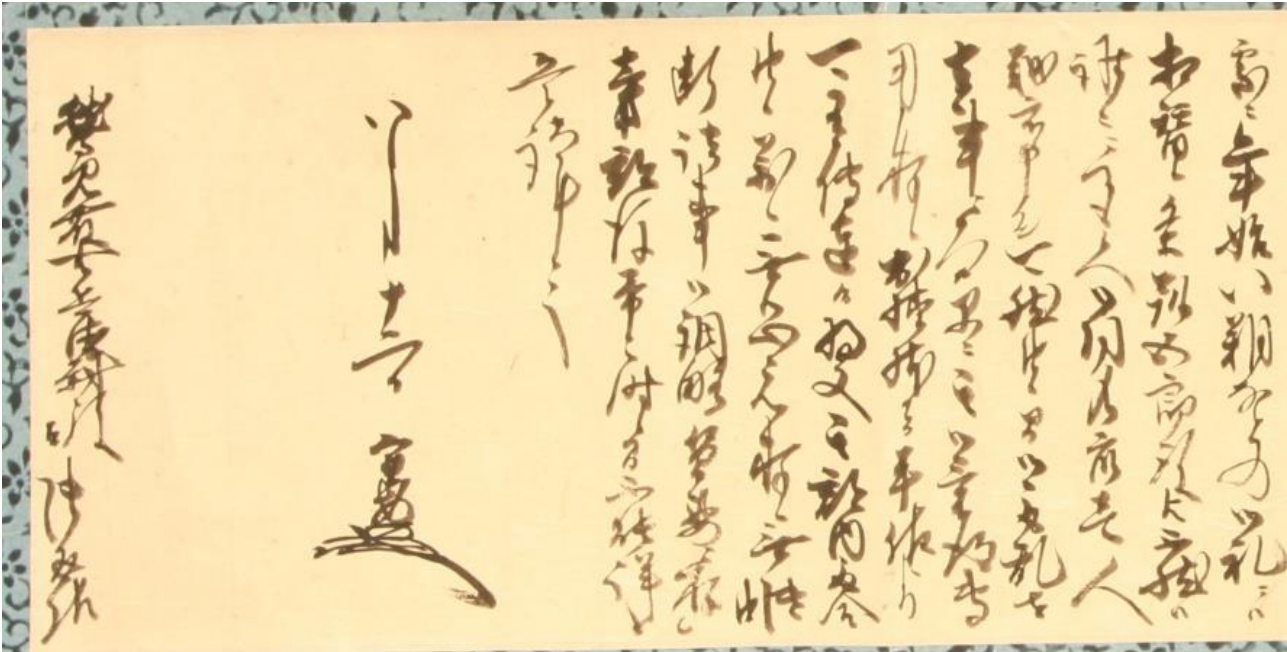
旁期後音之時候間不能詳候
そらうあひだ

断諸事御調略簡要ニ存候

(がてら(そうしなから)後の手紙が着く間は) 今詳しいことは書けません
つまびらかにあたわずそうろう

かたがたこうおんのときをきし
そうろうあいだ

旁期後音之時候間不能詳候



(恐れ多くも謹んで申し上げます)
きようきよう勤言
恐々謹言

八月十二日

じつあん (又はさねやす)
實安 (花押)

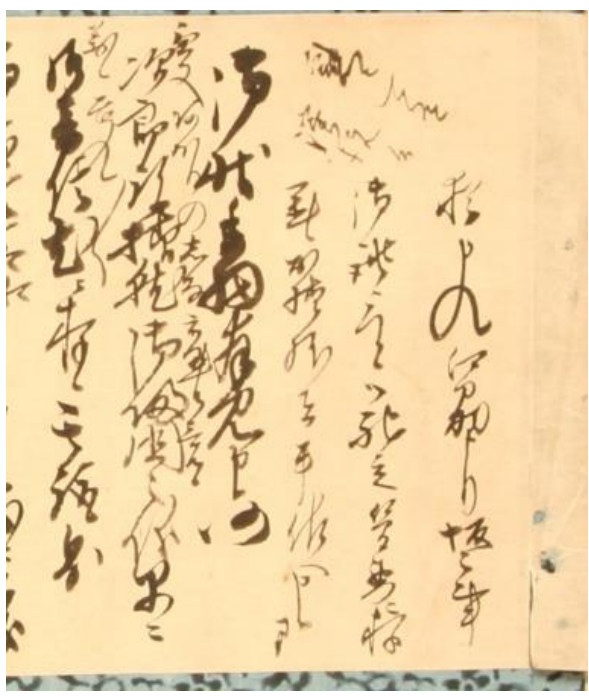
すみとうべえのじようどの
鷲見藤右兵衛尉殿

まいる ごへんぼう
参 御返報

斎藤實安はどのような人物で
あるかはわかっていない。

(追伸文||本文の前や行間、斜め書きの小文字)

(なお、 申し上げますに 江州(滋賀県)より坂のこと)
なお、 もうしいれそうろう ごうしゅうよりさか(人名か)のこと
猶々 申入 候 江 刃 より 坂 之 事
(ご注文なされるよう お骨折り(奔走)頂くことが 大切なことに思っております)
おあつらえそうらえと ごちそう かんように ぞんじおきそうろう
御 詔 候 へ と 御 馳 走 簡 要 に 存 置 候
(様子については 平佐へ 申し入れておく)
ようたいにおいて は へいざへ もうしいれそうろう
於 様 躰 者 平 佐 へ 申 入 候
(以上) 懇切に 申し述べがあるものとおもいます
いじよう ねんごろに えんぜつあるべくそうろう
己 上 懇 に 可 有 演 説 候



(付け加えて 灯り(ろうそくとか油)の品
かねてまた あかりの しな
兼 又 阿 かり の 志 な 被 懸 御 意 候
(大変申し訳なく思います 以上)
ばんばん おそれいりそうろう いじょう
萬々 畏入候 候 候 候

實安書状「その二」

(包紙上書)

さいとうびぜんのかみ
齋藤備前守

すみひこころうどの
鷺見彦五郎殿

ごへんぼう
御返報

じつあん
實安

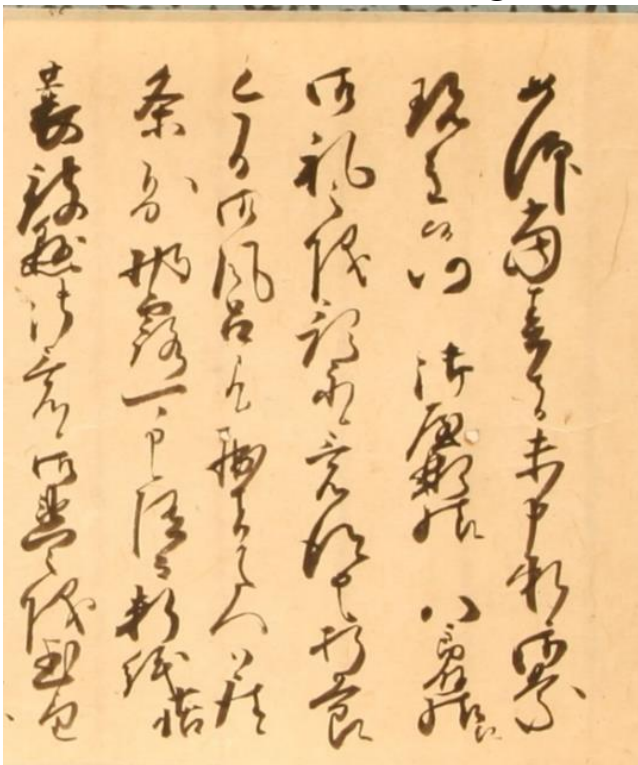
(本文)

(お言葉のとおりこの春はまだ承っておりません*「未」は二度読む(「未だ」と否定の「ず」)
おおせのごとく とうしゅんは いまだうけたまわりもうさずそうろう
如 仰 當 春 者 末 申 承 候

(お目出度く珍しい 従って 御屋形様)*一字空白は御屋形様への儀礼
ぎよけいちんちようそうろうよつて おやかたさま *御屋形様 || 土岐頼芸
御 慶 珍 重 候 仍 御 屋 形 様

(八郎殿様「土岐頼香」へ お礼の挨拶のこと 分かりました)
はちろうどのさまへ おんれいのぎ しめしあずかりそうろう
八 郎 殿 様 江 御 札 之 儀 預 示 候

(承知しました 其の機会に際し 今 お風呂にて)
いとくもうしそうろう おりふし こんにち おんふるにて
意 得 申 候 折 節 今 日 御 風 呂 二 二 二



(私共へ) お出での次第ですから
せつしやかたへ
ごさそうろうのじよう

拙者かたへ 御座候条

(何時でもご披露いたします) 従って 紙十疊「實安への御礼」
すなわちひろう もうすべくそうろう したがって りようし じゆうじよう

則披露可申候 随而料紙十帖

(蓑 心に懸けていただき) 親切のこと
みの ぎよいにかけられそうろう ごねんごろのぎ

蓑被懸御意候 御懇之義

(有難いことです) 僅かではあるが
ほんもうのいたりにそうろう けいびにそうらえども

本望之至候 軽微候へ共

(戴いたのですが) 蠟燭十本 進上します
とうらいそうろうあいだ ごみようじゅつぽん これをすすめそうろう

到来候間 五明十本進之候

(本当に) お祝い程度です とりわけ
まことに しゅうぎばかりにそうろう なかんずく

寔 祝儀斗候 就中

(お父上の事(藤兵衛死去のこと) 言葉では言い表せません)
ごしんぶのぎ げんごにぜつしそうろう

御親父之儀 絶言語候

(全く知らなかったため) その間 弔意も 申し上げます
たしかにぞんちせず そうろうあいだ おとむらいをも もうさずそうろう

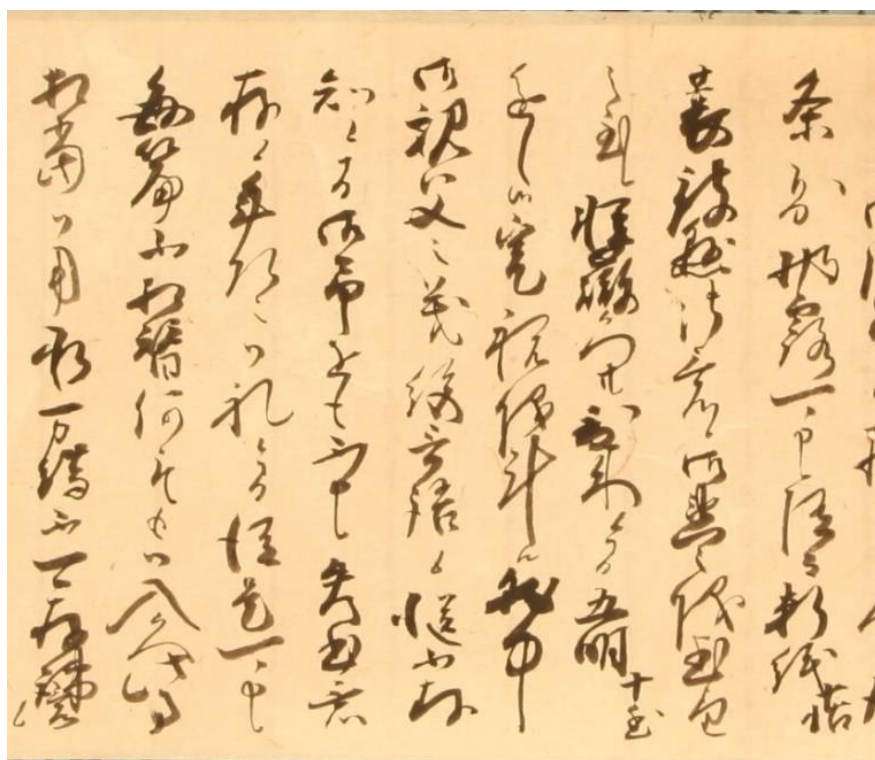
慥不存知候間 御弔をも 不申候

(失礼をいたしました) ほんいをしつしぞんじそうろう

失本意存候

(年頭のご挨拶は) 今 本状にて 申し上げます
ねんとうのおんれい きよう これによつてもうすべくそうろう

年頭之御礼 今日 従是可申候



(毎度の手紙 相も変わらず 何にも増して
まいへん あいかわらず なににても
毎篇 不相替 何一二ても 御入候へ
（当方はそれ相応の御用を受け承り 万事粗末にはいたしません）
このほう そうとうのごよううけたまわり ばんたん そいにぞんじべからずそうろう
此方 相当 御用 承 萬端 不可 存 疎意 候
（詳しくは松（影か新の字？）与三左衛門尉方が 申されるものと思えます）
いさい まつ（不明）よそざえもんのじょうかたが もうさるべくそうろう
委細 松口与三左衛門尉方 可被申候
恐れおおくも謹んで申し上げます）
きようきようきんげん
恐々 謹言

[土岐頼香 \(戦国時代\) - Wikipedia](#) によると

四月七日（天文十三年（一五四四年）以前か）

じつあん（又はさねやす）（かおう）

卯月七日

實安（花押）

すみひこころうどの

鷺見彦五郎殿（八代鷺見城主は鷺見彦五郎氏保だが、一四四四年卒去す）

ごへんぼう

後返報

藤兵衛とはだれであろうか
彦五郎とはだれであろうか
これらの手紙ではつきりしているのは、彦五郎は藤兵衛（藤右兵衛尉）の跡取り
で息子であろう。名代として使いに立っている。そして、藤兵衛が亡くなったこ
との弔意が、息子である彦五郎に対して手紙で述べられている。
なお、「鷺見藤右兵衛尉」が正式名で藤兵衛は通称で略したものと思われる。

